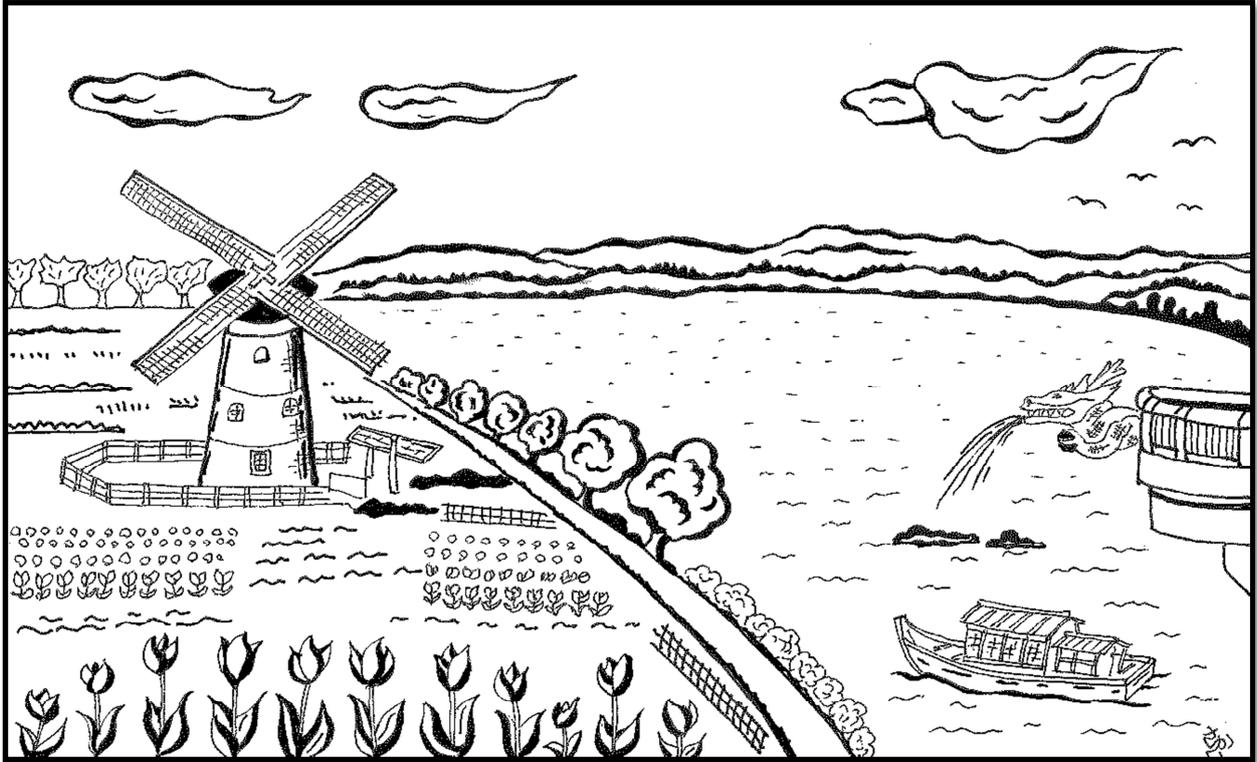


な か ま



影絵劇『雨を降らせた竜』より

『なかま』40周年記念号と佐倉市の今後

佐倉市長 蔵 和雄

『なかま』40周年記念号の発行を心よりお祝い申し上げます。この40年間にオイル・ショックやバブル崩壊、政権交代、長期不況、リーマン・ショック、少子高齢化の進展など様々なことが国内外では起こりましたが、『なかま』はその間も継続して発行されたと伺っております。これも読者の皆様をはじめ、投稿者の方々、編集に携わってこられた皆様方のお陰であると感謝しています。佐倉市民カレッジの総長として『なかま』には深い愛着を持っており、ますと同時に、この40周年記念号に原稿を寄稿できますことを光栄に思っております。

平成も20年以上が経過しまして、佐倉市も日々変化しております。佐倉市は平成29年に「佐倉城下町400年記念事業」の締めくくりを迎えます。様々なイベントが行われる予定ですが、このようなイベントの遂行には多くの市民の皆様方のお力をお借りしなければなりません。

私自身も佐倉市長の職を3期に亘って担う中で、市民の皆様方のお力には大変助けられております。佐倉のために日々活動されておられる、市民カレッジの皆様を始め、市民の方々に感謝いたします。

佐倉市は、今後も持続可能な市として、数々の困難に真正面から向き合い、「今何を成すべきか」を熟慮した課題分析と課題解決をなし、新たな発想を打ち出してまいります。また、市民の皆様や関係団体の方々と、一つ一つ丁寧な課題に取り組み、市民の皆様が誇りの持てる「ふるさと佐倉」を将来に引き継げるよう、「危機」を乗り越え、「希望」へとつなぐたいと考えております。国全体として大きな課題となっている人口減少、少子高齢化という共通の課題認識に関連しまして、佐倉市も、「第4次佐倉市総合計画・後期基本計画」並びに、「佐倉市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定いたしました。

諸施策を着実に進め、当市の資産である「歴史、自然、文化」を活かし、「佐倉への思いをかたち」にしてまいりたいと考えております。佐倉市は、自然と文化に溢れる都心や空港からのアクセスも良い魅力あふれるまちです。

皆様のお力をお借りできれば、今後の更なる佐倉市の発展も可能であると確信しております。この希望の気持ちをお祝いの言葉に添えさせていただきます。ありがとうございます。

「子育て」 今だから思うこと

小林 百代
(元 社会教育指導員)

突然ですが、「子育て」楽しんでますか？ または過去形ですか？ 一つの世もなかなか難しいものですね。

私には息子と娘と二人の子どもがおります。そして小学校の教師をしておりました。

子育ての最中は仕事・子育て・家事と必死で、もつと楽しめばよかったと思います。子どもたちには寂しく不自由な思いをさせました。仕事でも、「ああすればよかった」と思い出す度に今でも自責の念にかられます。

子育てについてはこの限られた紙面では全ては語れませんが、子どもが自立できるように一人で生きていけるための「生きていく方法」を身につけられるようにするといったことでしょうか。子育てと

いう箱の中に、躰という小さな箱をどれだけ詰めたくというよりは、その子に合わせて何を詰めたくかです。もちろん本人の努力もあります。躰は吸収率の高い九つまでは子どもと一緒に導いていく。

自我の出始める年齢からは、つかず離れず寄り添い見守りながら育てることが大事だそうです。それは教室での子育てでも同じところがあります。

そこで今までを振り返ると友人や保護者の素晴らしい子育ての話に焦りを感じたこともあります。が「十人十色」の言葉通り色々な子育てがあつてよい、その子に合った方法ならばと思うのです。

教え子や我が子が私にどんな評価をするか気になります。私は子どもたちからパワーをもらつて今があります。子育ては辛いだけではなくそれ以上の喜びや学びがあります。ちよつと見方を変えたと肩の力を抜けるかも知れませんが。

子育てには 「おせっかい」も必要

松田 義一
(元 西志津小学校校長)

私が子供の頃は、塾や習い事に行くこともなく、ひたすら野山を駆け回つて遊んだ。刃物を使つたり、火を燃やしたりと随分危険な遊びもしていた。躰には結構厳しかったが、大人たちが遊びに口出しすることはほとんどなかった。翻つて今の子供たちはどうであろうか？

私は今、学童保育所で働いている。通っている子供は低学年が中心であるが、週に数回、塾や習い事に行っている児童もいる。少ない時間の中で外で遊んでいると、近隣の人から「子供の声がうるさい」と苦情の電話が入る。仕方なく室内でチャンバラごっこ等をしていると「危ない」と注意される。今の子供たちは部屋でゲームばかりやっている

と非難されるが、子供たちだけのせいではない。子供は本来、いろいろな遊びをしながら痛い思いや嫌な思いをし、ルールや思いやりの気持ち等を学ぶ。しかし、その機会を実は大人たちが奪っている。

例えば、こんな場面をよく目にする。ドッジボールをしていて「当たった、当たつていない」で喧嘩をしたり、「俺だけを狙う」とスネたりする。相互に相手が悪いと言いつつ、自分の非を認めようとしない。「環境が人を育てる」と言われるが、何でも都合の悪いことは他人(社会)のせいにする大人たちそのままではないか！

ただ、共働き・一人親家庭が増え、地域での人間関係が希薄になつている今、家庭の力だけで将来を担う子供たちに健全な社会性を身につけさせるのは難しい。今こそ、「優しさと厳しさ」を兼ね備えた地域のおじさん・おばさんのおせっかい力が必要なのだ。

私と佐倉

宮鍋 和郎

(元 佐倉小学校校長)

『なかま』40周年記念号発行おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

佐倉の地で、仕事人生40年のうち10年間を過ごさせていただきました。佐倉小学校での7年間、そして佐倉市民カレッジでの3年間。どちらも数限りない豊かな宝物がいっぱい詰まっています。教員生活のスタートとゴールでありました佐倉小学校に思いを馳せます。

運動会の得点板を設置しているときのことです。何と、その裏側には、私の名前がありました。30数年を経て使いつけてくれていた得点板との再会。そして、当時の教え子の皆さんとの再会とそのお子さんとの出会い。二つの再会と出会いは、私の再出発への原動力になったのです。

一方、ご縁をいただきました。勤めさせていただいた、佐倉市民カレッジでの日々は、授業日が待ち遠しい充実に満ち溢れたものでした。

人生の先輩であるカレッジ生の皆さんとの新たな出会いは、これからの私に数限りない示唆を与えてくださったのです。ありがとうございます。そんな佐倉は、私にとりまして信頼感を増幅させ、気持ちを安定に導き、心地よい幸福感を味わわせてくれる地でした。いつしか、「幸せホルモン」とも呼ばれる「セロトニン」と「オキシトシン」が湧き出してくる地となったのです。

人間味溢れる素晴らしい皆さんが、夢と希望と勇気を与えてくれる素敵なところなのです。

改めまして、大学時代の恩師から学んだ「人間なかま」という精神を、佐倉で過ごした日々実感し、感謝する「今」であります。

佐倉にやってきた

ロシア軍捕虜

内田 儀久

元 中央公民館長
現 社会教育指導員

明治37年2月、日露戦争勃発。12月5日、203高地占領。翌年1月2日、旅順開城。3月1日から日本軍は奉天（現在の瀋陽）に向かい総攻撃。3月10日、奉天占領。

奉天は当時、満州最大の町。奉天会戦は日露双方の兵力が衝突した最大・最後の陸上戦であった。この会戦におけるロシア軍の捕虜はこれまでの会戦に例のないほど多く、2万余人であった。

ロシア軍の捕虜は日本に送られる。収容所は、当初、愛媛県松山市につくられたが、旅順の戦い、奉天の戦いにより捕虜の数が急激に増えたため、収容所の設置が関東に及んできた。第1師団では習志野の原野に大規模な施設をつ

くることとなったが、歩兵第2連隊の衛戍地である佐倉でも受け入れることとなった。

当時の様子を千葉毎日新聞から拾ってみる。明治38年4月2日、奉天で捕虜となったロシア軍のうち将校・下士卒320名は佐倉に送られた。このうち将校は藤屋に収容、下士卒は勝寿寺、妙隆寺、相濟社、鹿州館に収容された。

捕虜は日を決め、午前中、警備兵と通訳をつけて市内の散策を許された。午後にはトラップや玉投げ、将棋などをし、夕食後は必ず胸にかけたキリストの彫像を壁間にかけて讚美歌を唱えていた。

5月15日には、旧藩士が我が国の精神を示そうと、剣術の試合を見せている。翌日、捕虜は習志野バラックに収容されることとなり、佐倉を出発した。

記事をつなぎ合わせていくと物語となり、知らなかった佐倉が見えてくる。これも歴史を学ぶ楽しさと思う。

40周年記念号の

発刊に寄せて

『なかま』に想うこと―

江波戸寿人

(中央公民館長)

『なかま』の創刊号は、『長寿大学ニュース』として、昭和51年11月に産声をあげましたが、広く高齢者の自主的な活動と輪を広げることを

目指し、昭和52年5月、『高齢者だより なかま』に名前を変えて親しまれてきました。そして、更に多くの方に見ていただくことが出来るよう、平成15年、現在の『なかま』のスタイルに変更され、本号で40歳の誕生日を迎えることが出来ました。

『なかま』の編集にあたっては、長寿大学、高齢者短期大学、市民カレッジで学ばれてきた多くの学生がバトンを引き継ぐ中で、名前の通り、仲間の輪を広げてきました。今回、寄稿するにあたり、

あらためて、歴史ある編集委員の一翼を担わせていただいた時代の紙面を読ませていただく機会を得ました。懐かしい編集者の名前や、当時の世相や情景が描写された文を読み継ぐにつけ、実に多くの編集委員とご投稿いただいた方々の協力があつたればこそ40年であるとの思いを強く持ちました。

最後になりますが、編集委員の皆様の益々のご活躍と、多くの読者の皆様からの、様々なご投稿をいただくことにより、末永く愛される『なかま』として成長を続け、50年の節目は当然のこととして、還暦、古稀、傘寿のお祝いに繋がる発刊をご期待申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。



佐倉・城下町 40年記念
事業イメージキャラクター
「カムロちゃん」

『なかま』40年のあゆみ

▼昭和51年11月

当時の市民カレッジ「長寿大学」が『長寿大学ニュース』として、初版を刊行。

▼昭和52年5月

現「佐倉市民カレッジ」が開校。これを受け継ぎ『高齢者だより なかま』と改称。

▼平成9年・20年

(社)日本善行会から長年に亘る善行運動の成果として、二度に亘り、善行賞を受賞。



▼平成13年10月

300号を刊行。『なかま』と改称。

▼平成28年11月

市民の皆様のご支援の下、初刊号から一号も欠かさず40周年記念号を刊行。

ここに、その記念を記す。

(編集委員 田中修司)

★本号の表紙にご協力いただきました酒井様が所属する「影絵塾9」は、佐倉市民カレッジ9期生が立ち上げた団体で、市内を中心に活動されています。★

あとがき

『なかま』は、本年11月、創刊40周年を迎えました。記念号発刊に当り、ご多用中にもかかわらず、寄稿いただきました方々に、心よりお礼申し上げます。また、表紙を飾ってくださいました「影絵塾9」の酒井様、ありがとうございました。

次の50周年に向けて、愛される『なかま』をめざし、来月号から、また一歩、歩んでいきたいと思えます。

ご愛読いただいている市民みなさまのご支援を、引き続きよろしくお願い申し上げます。

(編集委員 若岡照秋)